『桜の園』観劇ツアーレポート

伊藤優花

私は年 11 月 21 日（日）の回を観に行きました。私にとっては初めての SPAC、初めての静岡。早く訪れたかった場所なので、バスで静岡駅に降り立ったときからわくわく。調べると、静岡駅から SPAC のあるグランシップという複合文化施設までは徒歩で 40 分強とのことだったので、「これくらいなら」と電車は使わずに歩いていきました。てくてくと歩きながら、ここで暮らす人たちの生活の中に SPAC という文化が多かれ少なかれ接しているんだろうなと考えていました。

そして、グランシップに着いて、建物の外にもたくさんある今までの公演を記録したポスターなどを見ながら入館。

入口横には「今日の一言」が掲示されていました。この日は「常識はそれほど一般的ではない」（ヴォルテール/哲学者）でした。なるほど…。

上演までの間にも、SPAC の手厚さを感じる場面が多々ありました。その代表的なものが、出演俳優によるプレトークです。このプレトークで、作品の時代背景やテーマなど、事前情報が少し予習できるといういうわけです。私は一応大学では演劇学専攻だったので、前情報が全くなかったわけではないのですが、上演を資料として扱うのではなく観賞をするのは初めてだったので、このプレトークを聞いておさらいできたのはかなり良かったです。

さて、いよいよお待ちかねの上演です。まずは舞台美術の第一印象から。舞台後方には空の映像が映し出されていて、雲が流れている様子が見えるのが特徴的。舞台上にはシンプルな椅子が 2 脚と棚の骨組みが 1 つ。さらに、アクティングエリアの左右の端に半透明なベールが吊られています。そして、作中では日本語とフランス語の二言語が話されるので、舞台下方に日本語字幕が映されるスペースがあります。

私が今回の観劇で興味があったのは、「なぜ、今、『桜の園』なのか」と「この『桜の園』喜劇なのか悲劇なのか」ということです。

まず、「なぜ、今、『桜の園』なのか」ということについて思い起こそうと思います。『桜の園』は、ものすごく簡単に言ってしまうと、「破産しかけているのに放蕩な生活を捨てられないロシアの元貴族一家の土地が競売にかけられて、土地を手放す話」です。時間的にも空間的にも、現代日本とは離れた設定で、今回の上演ではどこに現代性が表現されるのだろうと思って観賞していました。私としては、「元貴族が衰退していく中で、なかなかそれまでの生活基準を改められない人たちはいつの時代も存在する」という普遍性くらいしか思いつかなかったのですが、鈴木陽代さんへのインタビューで解像度の上がるお話を聞くことができました。

鈴木さんによると、普通の日本的感覚の『桜の園』だと、「郷愁」にフォーカスを定めがちなのに対し、今作では桜の園の主人であるラネーフスカヤが「もうここから出ていく」という決断をしたことを重要視していることが今までの同演目とは異なる点だといいます。2020 年、2021 年と、COVID-19 というカタストロフィーが起こり、世の中が停滞しています。しかし、このまま鬱屈としているだけでは出口は見えない。打破しなければならない現状があるのは桜の園の元貴族も今を生きる私たちも同じなのですね。それが、今『桜の園』を上演する意義だったのだと受け取りました。

次に、「この『桜の園』は喜劇なのか悲劇なのか」ということについて考えました。チェーホフがこの作品を「喜劇」と称したことは発表当時も驚かれたというエピソードが有名であるがゆえに、その点は気になります。あらすじを知った学生の頃は、どう考えても土地を手放すことになるという状況は悲劇的なのだからこれは悲劇だと思っていました。しかし、今回の上演を観ながら考えていると、一般論ではありますが、「人生のどこを切り取るかによって喜劇か悲劇かは簡単に変わる」ということが私にとっての答えとして腑に落ちました。

確かに、戯曲の結末ではラネーフスカヤ一家は領地を失い桜は伐採されてしまい、哀愁が漂います。が、彼らの人生は物語が終わっても続いていくのであって、このエンディングは人生のエンディングではありません。人々が生きている様は、いつも流動的で悲喜こもごもが移り変わり、そして矮小なものなのだと思います。したがって、あからさまに泣かせたり笑わせたりするような演出をせず、それぞれがそれぞれの都合で生きている様を見せることで悲劇にも喜劇にもなり得る題材として受け取りました。

土日の一般公開以外の時は中高生に向けて観劇体験を提供している SPAC。インタビューした鈴木さんと計見さんに共通していたのは、「観劇に来た中高生は、分からないなりに分かろうとしてくれている」という手応えを感じていることでした。演劇を愛好する学生ばかりではないし、そもそも演劇とはどのようなものなのか分からない人もいるでしょう。そのような中高生に答えのない、しかし考える余地のある何かを提示することは、単に彼らの人生の地層の一部になるに留まったとしても、確実に意味のあることだと思います。

今回、観劇だけではなく、インタビューに協力していただいたお二方のお陰で SPAC の活動の片鱗を見ることもできました。お二方とも、ご多忙の中ありがとうございました。